

宮城野
志乃婦
繪本
敵討白石話

二

13
3306
2



13
3306
2

繪本歌詩女傳卷之二

月福

七郎之湯屋男子三人八季

兄背の娘吹礼回園と初合

右八放蕩丸碎乃園

右八多治郎おきのよいと心園

兄背の女子都へ登る幸

月園

大正十一年八月廿九日寄
本大學出版部 贈



二女城のちよき若めらうき奉

日 國

孝女山城のちよに漏る奉

徳ゆら属中旅人を悩と國

武者假幻山中と宿りと需る國

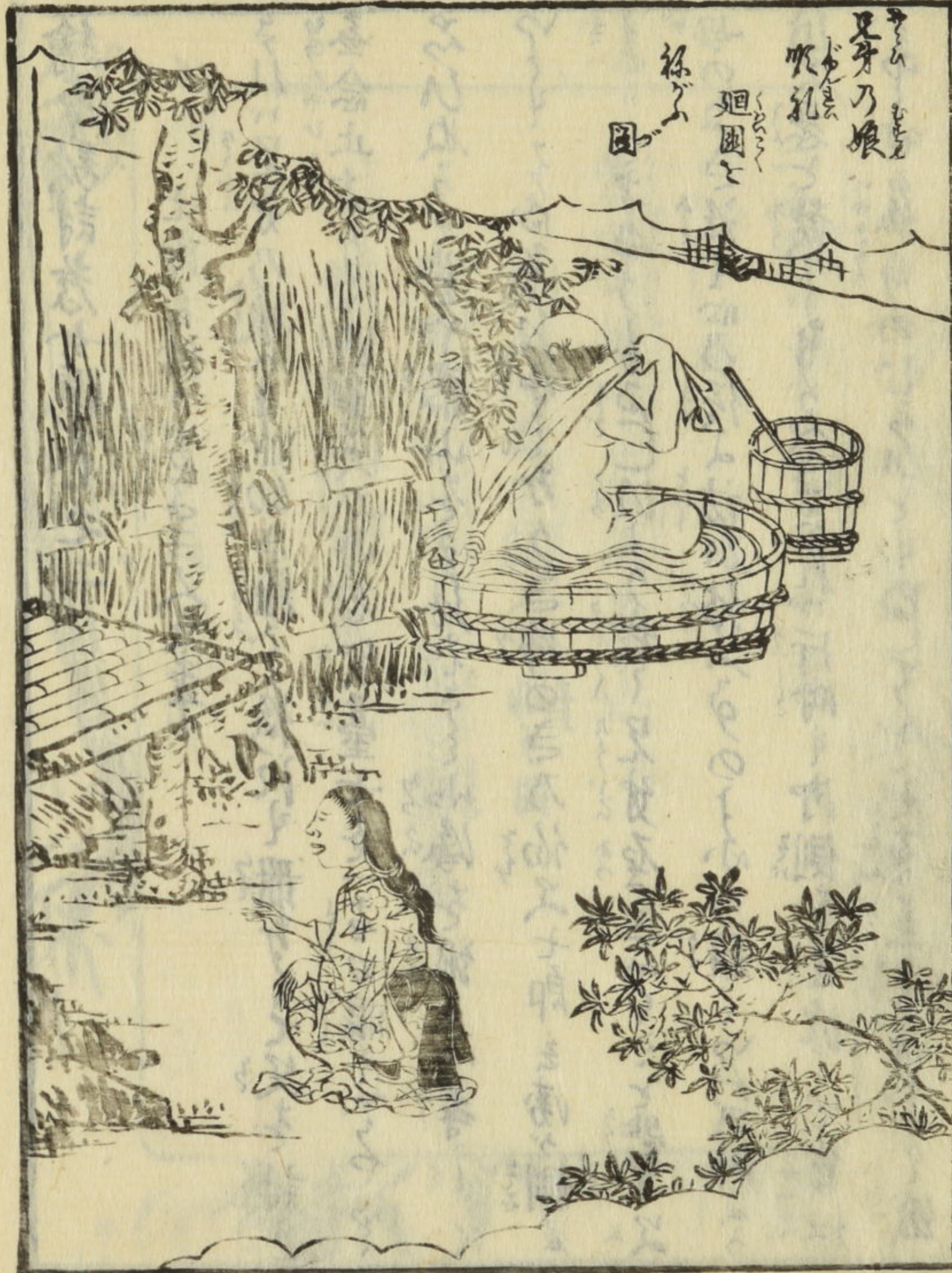
孝女城のちよ漏る國



繪本歌討孝女傳卷之二

七郎玄清が男子三人之事

これ兄弟の娘のまご切き雅と後には罪を討てて父を討て
念止方々く剛勇大力の志賀基七を一方の眼とてやや
あひぬるぞ是や泰山をまたたきと小海を城るふ等しく
ついでにあはれ事なりき婦のき乃伯父七郎玄清が側
よりしてや母うもはしはより我く兄弟厚きまごを蒙り
母のまき法も心乃候よ訪ひ侍るものよ小あ雅くつ川の村より
け大悪と鞍下もくきされは斤耐も御側を去はして官仕
事とせぬ事のむらひとれはしてんこそ奉えりてゆくと城



画本千石言卷二

足身乃娘
吹礼
廻園
縁
園

又母を失ひ心もどれ魂も散し仕人なるべきなりと母へ
 へんらびきれば兄弟や合せ坂東服れをせり父母乃後
 生とも訪ひ我々の法はしき宿業とも譲りらんと思ひ
 侍人の習ひ乃ては後ひちんやと習てやれ七郎を侍
 をよりこいひより此の身をばりぬ我々等歳いまで切けなく
 殊も女乃弟のちるべしと服れ周囲をいせり巡り強らへしけし
 き山治世しき後り仕方か勢のさへし幼悩むは雅き女子とい
 うぐりゆり侍らき去屋も乃あふ今にみまもを
 て兄弟もは生長し叔父も奴僕を具し山城もこの愁ひ
 るき侍とては心静し服れも雅き者の腹をき屋も我

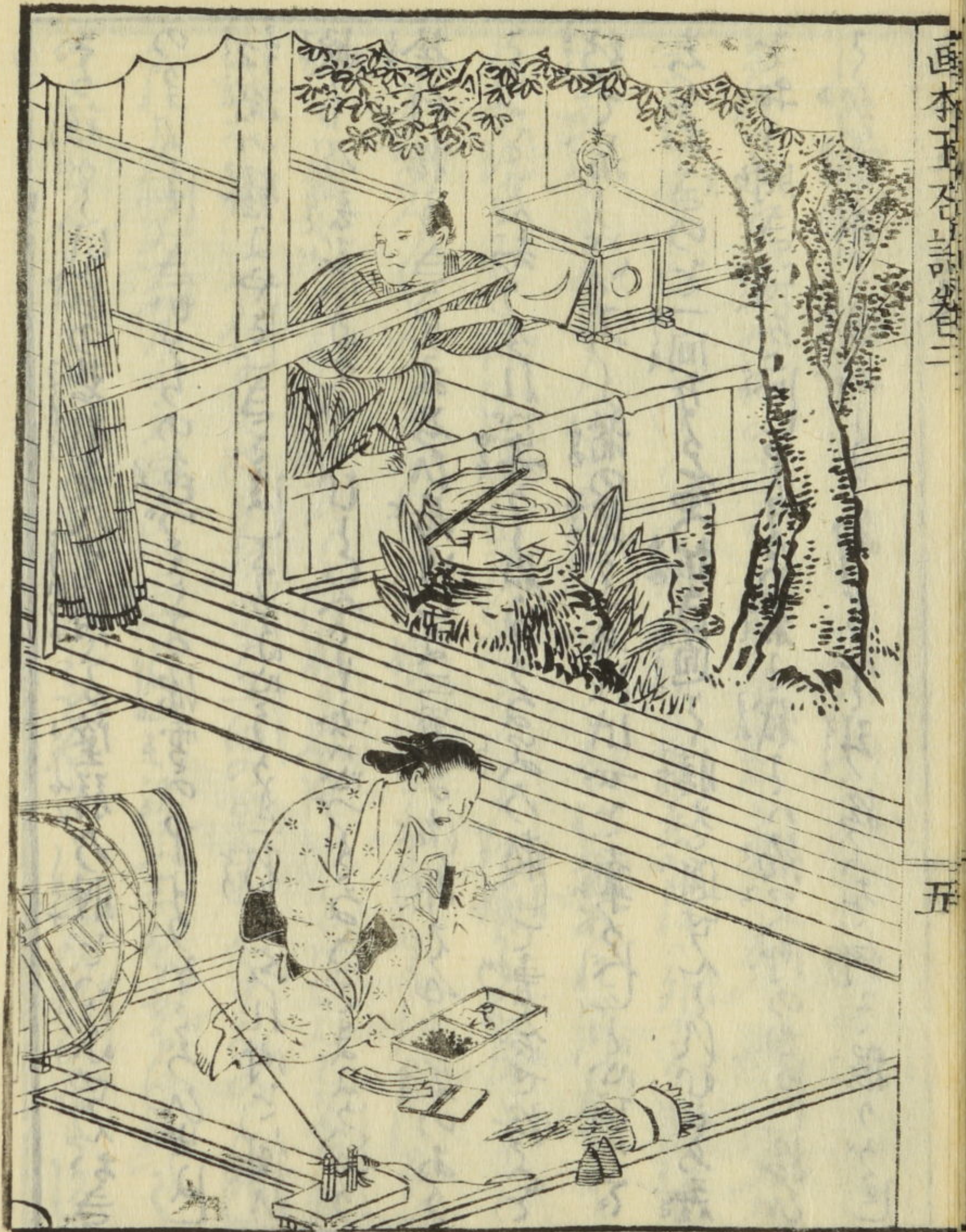
とく更の家をさき乳もはしこれより門く兄弟の女強て
 出づきあうり心方しはれ其年の暮ぬ年改りぬは婦
 十又妹十三兄弟もは是同空観うるはしく答の花のふ
 ろびん幼穠乃毫敬つさへはみ村中より白石の城下より
 七郎を湯が方へも考てりむろ強き多々れ七郎を湯
 男子三人あり無飲も右はと今午二十二女の嗣と定め
 せし生得陸弱し酒色も孔道博愛を好し家業相継
 せしき者も淋ざれば他の九郎右衛門とてる弱が許へれは
 ぬ次と十九女名瓜五治郎とよびく是れ弱者の生得るは
 縁めけ二男をて世継と定めぬ三男の十六歳を名と三男



圖本
 石
 記
 卷二

とつ威長乃後いお材をから田地をより別業をせし心通る
 さればと成他が娘婿のきりの二男子活即が妻とあり妹乃のよ
 三花が嫁しうさうのく七郎を清が産まらん外より需む
 方あれども曾てこれよえ敷と種く辱む者あれ内急とあ
 して改るよそ再び河をぬれ者ありしは嫁をを得たりと
 て見受人くくうやぬ二人の娘けしをば心うたふにほひ
 初てい我くが大事といふうにありぬれしといへんとは分私
 こ心を若しめ入るれ時と打ちて一向のさし出んゆきをの「隙」
 くれど叙又若乃まち母のりりしと給ふ志を奪はぬ如く
 のがさ物んし心るきおおきとんとやうくにちひぬの是より

さうぢうけ家の惣取を八生得る陸弱乃性といふ小せんちき
 のがうらほ「きか」らの色づゑる海雲の中よりかろろひ出は
 紅梅の整よやば「しんは」くふ心ううと「お」よられ時と何ひ
 懐し乃云ふ糸のていひとくも女心づゑさよきとまよふゆり
 捨り物うきゆぬるひ居りしよ二男子活即をゆく兄のあり
 とまよとん知りたれが安うぬゆらぬ乃敵て妻合せ給ふと
 結そ居りいづづ若の足ごめれけ女と棄るべしと心ほいさ
 ちくかきのと一回ちる交指き道と情を通せんといひとち産
 と押し開き河を「し」やたるの君と我とい伯父内の中り「給ひ
 く結末承く交婿しりぬてんを引給ふを何そ程りがはし



く夢ひて滑しひ糸しほるきえ素君よまうせぬるけりな
 とは三とせ又とせと経りしうと人乃つらふたれは
 此は後とてつとせ婦人やとそり故して迎出たり
 次郎
 ちうまふふちうつたひ親を女よんせつらふ乃私に
 ついで
 ついで
 究つて人目のき間を伺ひたり

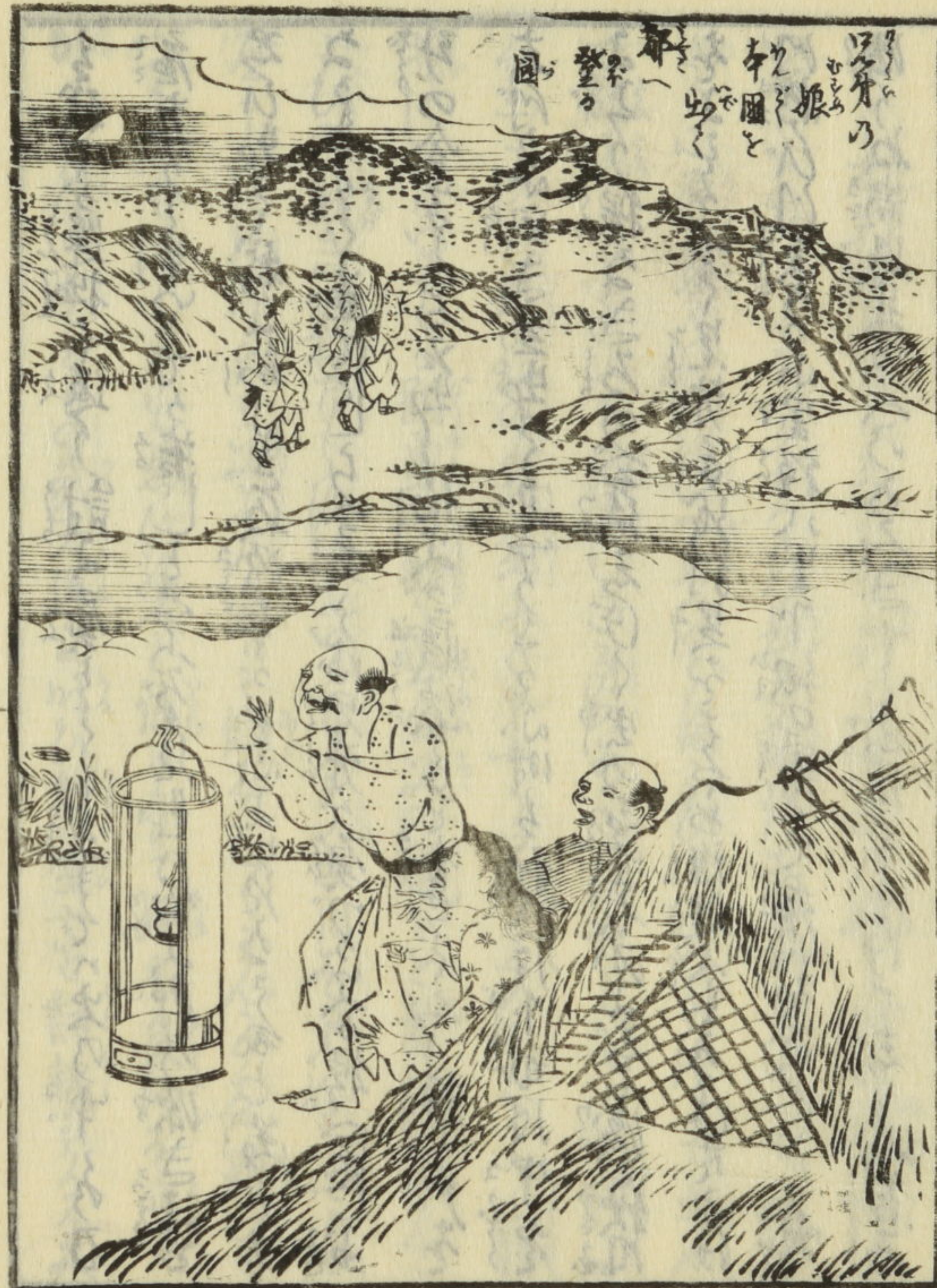
兄才乃女子都へつらふ

人生れく婦人のふぬるるる百身乃若樂他人よする世
 宜ちり哉と若他が娘おきの母の胎を出く後よ十余身た

やち乃雨露といふ風情るれど心も別な雄男も抑らびごき
 及乃歌を討んも偉大志とつて世にあり女と其心異とつて
 打んるさま乃ふじ色をいふせん戯男乃引ひ禁きを治
 方るべし
 妹の乃ぬをゆりさほし
 不令今宵夜交ふる小終は是よりまりせ都の方士志を
 やとちひ定めたるをやいごりも用えはしとちひはそ
 女はむれとさこそちひ人の目さちか知ちらさるはさび
 ねはゆんり維らふじ用えとちひ何れをうそのへんま

くし帯引き出し先よきくゆりあそび乃嬢しげ小波と傳り
 つぐと伝へしと定むる長き旅路を疾入いさけ
 たり小波恩うけし伯父表いし傳ひさるる作てあん
 で旅立ちるといふはしき牙のあそびやとそは源よ
 る道よりと妹のおのぶお兼ふく中やうい婦上のとさむり心難
 押していさけう別勇の歌よ出合又の眼とと教ひけしと
 まいの歌きい教へしけしといさけうさるる目をもんりえう
 なるは只何ゆと又上の傳と讎をしきまをを樂し
 ようともしけしと悲び後と涙ふを婦も良辰を止先
 のうたのをさよの武天運よ叶い歌臺七と討謀とらうと

ち我くが運拙く返り討は負とくしままでい火の中なる
 庭かりとといさけ若しとさるるは伯父河乃流きと
 ちいもく我よ知しとぬ源のぞ心よりたかきとさるる
 ちうとととと並てにしら入るるは兄分り負つる又か娘(屋)お
 身の金子ととと出し伯父か辰次女とと合せととと拜と戸を
 志向く小用きととと出さるる中やうととと秋八月下旬月中を
 よより振るさるるのさるるさげく虫のさるる人よととと後秋風
 をよとととやう兄分りお兄分りをさるる誰退人もあつたけ
 け聴ひのまらう小里種八里下細の園ととと夜いなりくと明
 後りぬ尚退来る人乃あふさやととと夜をまけてとととぬ若る



口舟の
娘
本國と
知
都
一
登る
國

画本玉石記卷二

八

たぐり勢に押あつたは「やほまゝなるまづて入後のまぢりて居
 同へ人も淋ざれど家を出て一を耐より見せがめい捨ら後も
 きつるれば「妻籠」の伴連の太本戸おるぞく終るのり乃と
 ざれと誰と頼とみ夜のるらやる見をやういたまはれと
 てしと年月を悔月世「我」が今このたまを羨み水より
 こそや悲しく押がまゝんと涙せられたる夜が園歌をいつく
 接に終後が恨られたりくして上野の園は悪にうり妹のぶ
 姉は向ひてやうういやく見身が在郷とたまよひおそれども
 歌乃み糸とつぐくも知ればたえ巡り逢うともも切き
 我くももに付るべき墓七かうはううくろ本まて遂

るれやと打まをれと怒るるふ姉は愛くや中うの御身乃や
 と、歌は愛ゆり叔綱の逢人女のむに付涙は金見者、あ
 びとれ一月もたや都へより彼地まで宮仕をまはし「我」
 き勇猛たる押のことし「海」も小歌も助ち方を乞へ墓七と
 討涙はどが我元来のころうじといまごんざる去遊のれとも
 當時武おの御座は都るれい諸國の人へ情をへと歌とれ
 づぬる後もあはし「我」く「足」雅き心よ又の徳成むつくと
 ちいさくさるる急力の佛作もなと加渡乃みさうん心籠らひ
 そとつふまおのぶ諾きを帰る人の宣ふと「音」理まうひくひ
 志し「う」くしとも強勇の歌を討んよ女たりとて人斬

と人を去りていづるに助を乃れとむとも車馬の遊難
 ん都とてまづ入せば親類の遊人又は人を及ぶもあはひたて
 こそいざれよく勝負を遂るんとし人を奴奴を打ちてあひ
 られたるの業もて今より後乃れ齡をりて親類修好しより
 強勇の志かき其至七女乃れに討たきや只神がまうりも
 其至七の玄術勝進し其のこに力を由りて助を乃れとむ
 之業いりきとていづるに後には秋の日のなやむ
 傾き人里をきこし落しにさしうれは泣の宿人ゆりて宿り
 求むべきや疾をこめてけしぬれぬべしやと足牙惜くして
 てお涙とれと疾ををぬい今宵むうううの歳をなす山

洛成りてはと麻後の外世しき者もはし行時もよく
 都と心先づ門流るれは泣くもはしとて雅き女子乃心
 ばくもまゝぬし落をたたくゆりもく日と毎く山の落
 よまのて宵園のいと晴きと星の光りをたよりとそま
 歩ゆしが松吹風岩の響きよとまはしとて落はを
 物凄きとぬる人里ゆりて心落しきとてまはしとて
 物と心落しとぬるもゆりてまはしとてまはしとて
 一女城のあふ若らうりてまはしとてまはしとて
 空に山城をぬりて世と後る能助とて西者あり四の南朝の
 一軍にける氏云乃威勢善くして終は天下一と帰しとて

考女
雅
野人國



とゞき方々き候に往來の縁人の衣服を別洛用の金銭と
 かいまゝに世後らたつきとぬく長々ふぞはじさまの者三人に
 人集りて皆態助がゆりに逢は山奥の菴とて居る世と
 さらぐ心の候は言はるは夜半がゆり乃紙は居守の文を
 倉掛の文といふる友人の若者よき得物とすは別洛にて
 紙は態助が稱譽は致らんと申合せ松明を燈は山を來
 かりがまき乃かのの足分ははたかくゆりあひ文といやをるを
 知り兩人の女を呼び我くも盜紙なるふ汝多紙ト金銭
 のゆり紙のよきはし物せよとんる名は紙の少女郎とて衣
 物といふてし用はは洛用の紙はたくる紙と松明なりとあ

三考とて尋思乃女なりせばは候ゆいと遊まどふがれはさ
 思ふくもろくまるとまりて盜人は何れ我くは奥の若者
 がとれは父母ともまゝい言ひ言ひ者もまゝなりゆり
 人の情紙も板東紙は出する若者ゆりまされは後乃
 月をまゝみまき中うたかく今宵は宿りと雷しんは候は
 け山中の野宿とてまき心してまゝまゝあるは若者遊の御求
 りまゝにたれ物といふはゆりも持ひゆりゆり紙もまゝ
 女のまゝゆりゆり中と夜とまゝ歩ゆりゆりは囊中もたれ
 ますゆりゆりゆり我等の不運はゆりが合せ食はゆりゆり
 へんゆりゆりゆりゆり松明乃ゆりゆりゆり二人の容色

画本玉石話卷二

二二



徳助ノ属

族人

悩

園

うやめの妻妃はち西施を慕ひてわらに乳を添づるところに夜と
 りて纏ひて天竺の碧雲泥中より蓮乃ほく咲ゆるふ如
 うりやあそびく文六の向ひけ兩人の女願るをまきあう我魁着
 能助は此定房をまひいよ兩人を具して菴よ冷く衣被全
 根とゆくりより其功大かりといふそのひやうふふ文六の基
 ようらび是よこころ得抱けゆじと娘のよと九引ま初とわ
 らんと叫んで迎ゆる文六や新引とらふ動せは海多に奉
 きり刀んとらとて我くかく斗ふといはくは強者能助のまこと
 も其て身いひまこと廿六女色白く眼清く美貌の男子とて
 こそあれ我くしけ人のよちめく日夜道園と細細令根

衣服を奪ふ能女へまらるれば衣食乃家ころる山乃たに
 乞食の收れみいり身々勝るき海多能女乃心よ叶ひ籠籠と
 蒙るべけとの幸ありじ思ふくまらるる未れやとてまて引つ
 初いこの膝はしあるとせ給くとまらると能女と名と名「き
 荒男宙の掲げ一糸の山奥にて連切しち五惣ちうけれ
 次才たうり

若女山城のふみ流るま

城者能助は數十人の属を北方へ引つ後人とやびやう百室
 衣被を奪はれしそあそび菴の内へ酒と温り一人の奴能助
 をまきせむやの若乃まはれを待居るふ菴の外に人あり

武者修好
山中
宿
需る風



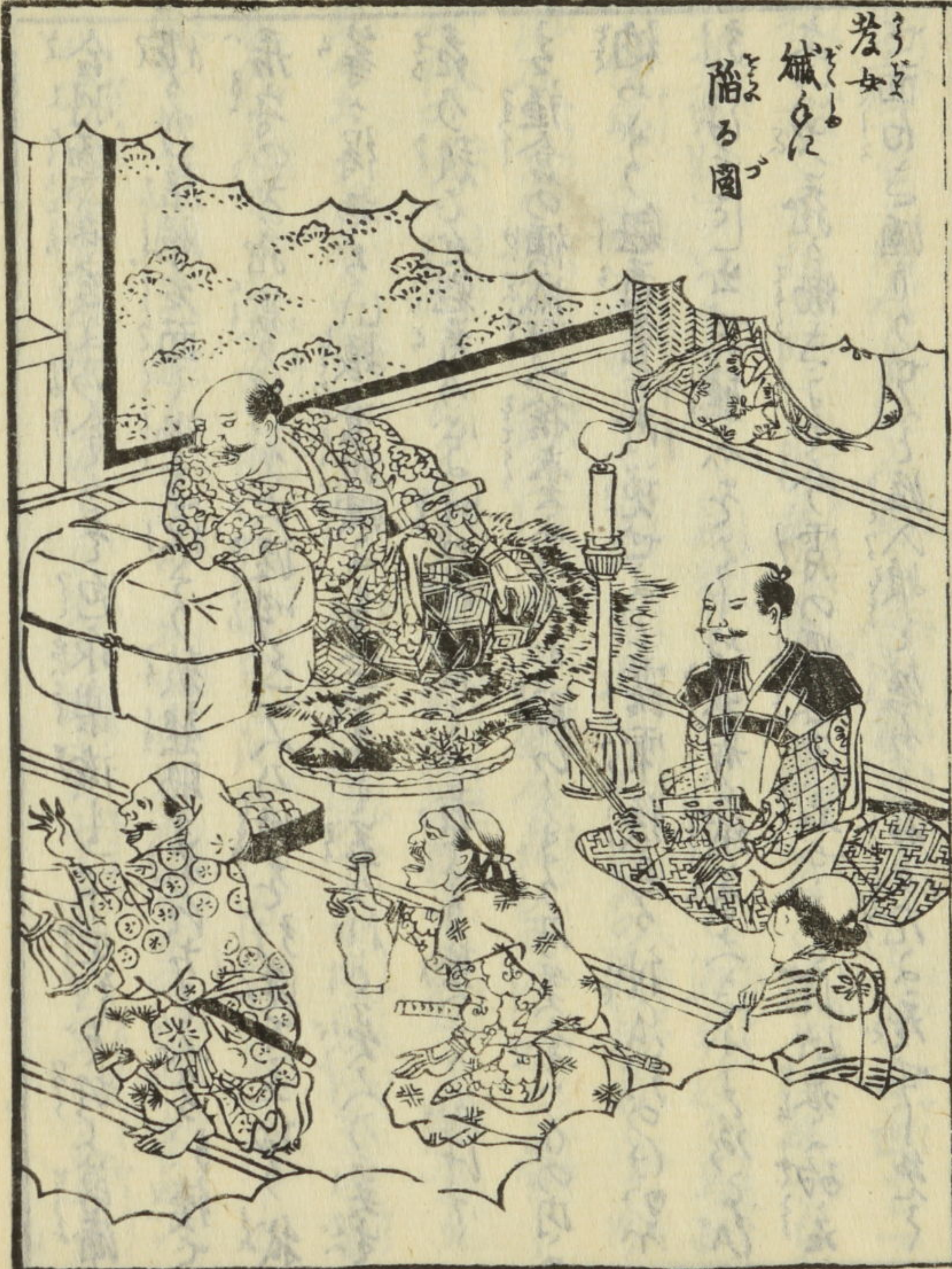
諸國武者修好の者方より山洛へ踏進み宿を失ひ難儀
みは間一夜の所宿をめぐり終りにとて由修助心は笑ひ合
武者修好とて若かりし属子とありしは修好の
中さばお頼む衣履と削んと心より一宿とゆはぬは波縁人
たはよりこい席よそく懸成耐と修助つらけ男と月乃小
年の尺廿三歳面うく玉乃と眼の光りい星乃懸るふ似く
見物者の者といふ人びを多く語しつるは縁人懐て三杯と傾
く樹の下の尾崎へ出張せし修好は動る西十南の松右衛門今雨
の得物十かへと荷物の内いふは修好も馬諸とてと集ひるなり
修助が茶の俵は雲の間に水の樹る人出く見合はるとよ

画本五石記卷二

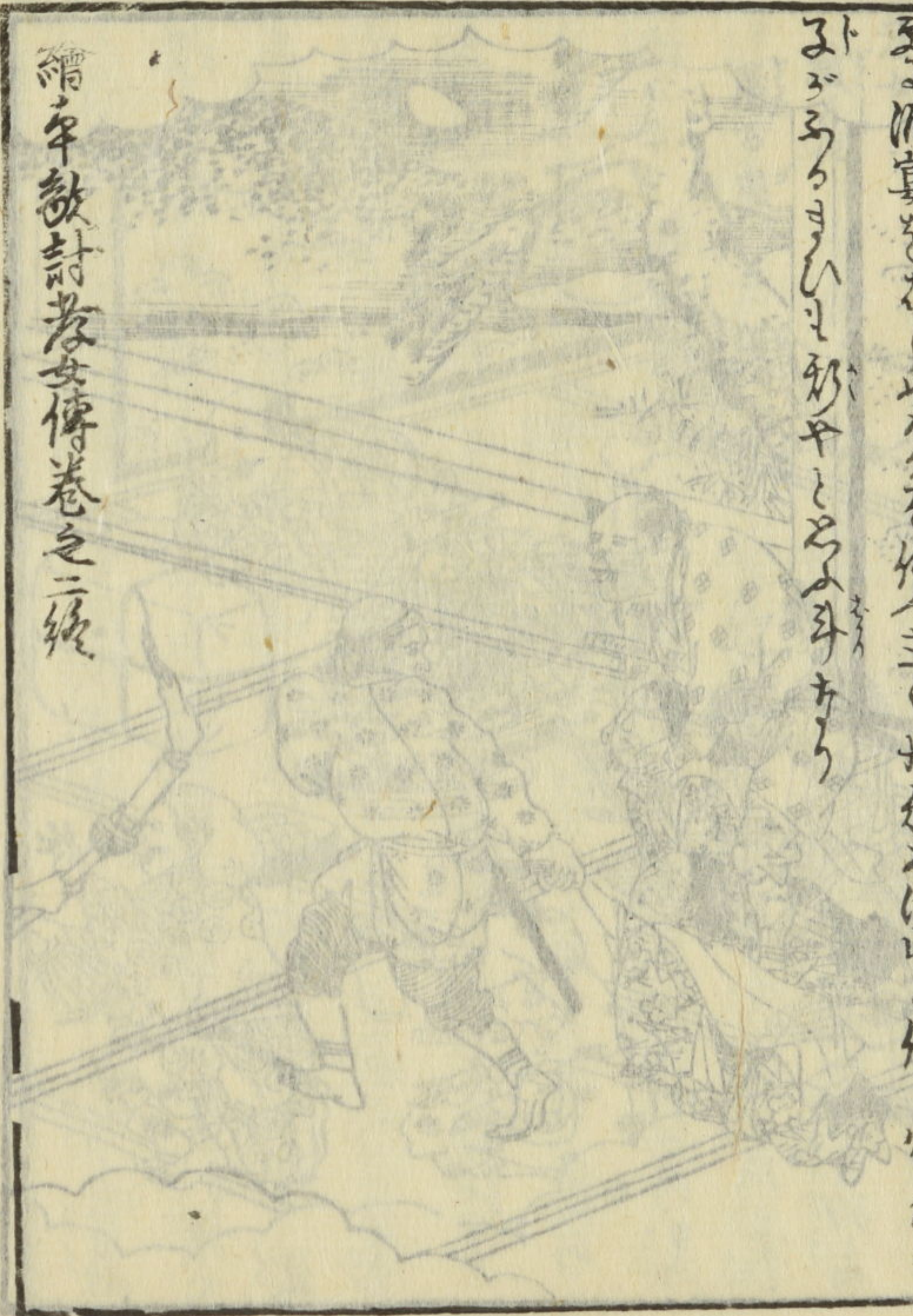
常陸へある商人と見たり馬を荷を積来りしを論い互に
 討つ接する切りけしは彼商人も是の者といふは縁の接二
 三打鉄いけいそ我の敵討とまきういふは迎の接を馬奴
 下僕と敵の接のどくまう去馬と物二結の荷物我う今
 宵乃も名褒賞は取らしと中々の然ぬまはし西人の功を賞し
 叔荷の繩と切用きんるふ于懸于懸縁縁雜嘆の聲を接入り
 然ぬまはし美い捨くしげし埋り我價の下虫塩魚海等の妻
 更の明日より妾と禁縁有のいと喰ひに」と一矢と接して
 面をめぐりしを退りまはし牛切は死百舌妻の伴也女自乃
 三八六角の忠を在馬門縁るは先の働きの少くはれと草中馬馬

合羽燧は夜更にゆきを包永泉後二十正引どはし高浦
 惟り乃旅服を面く働き位より教健助が来た方より接して
 居守の女冠倉うけの文六は叫ぶ二人の娘を引連れてまはり我
 等が得地まは娘喰加減まは三三年も若たれど是人のまは
 死乃親を冠着乃まは叶わぬ我か者より禁より肉けり
 まは種倉の傾城町へ捨棄しとまは百りまは乃黄金の内の
 納めより冠着を河境せよと露帯後まは神引のけい
 引よけては「出せは然ぬをまは下は並居る然ぬまはまは後まは
 文六は死に働きまは今宵の酒真ぞ若中まはれは娘の碓を
 せ面白き酒りりせんとは入娘と然ぬまは右と左は座せり笑

若女
城の
陥る圖



又酒宴をとりめたる所他人きて丹后之山は怪し酒を
みざるまひし初やとよみなり



繪本歌討女傳卷之二終

